

## 家庭的な場でぬくもりある最期を

サルの世界にも文化があり、若い世代から群れ全体に広がり、受け継がれていく——世界的なこの発見の端緒をつくった三戸サツエさんは、私の憧れでした。宮崎県串間市で小学校教師の傍ら、サルの観察を続け、文化の伝承に気づいたのでした。

そのサツエさんが95歳の時、脳梗塞で倒れました。病院で鼻やぼうこうに管を挿入され、外さないように手足をベッドに縛られました。口を固く結んで水も飲もうとしないサツエさん。「死のうとしている」と直感した70歳の娘さんは、宮崎市のホームホスピス「かあさんの家」の市原美穂さんに泣いて頼みました。

それから2年後の昨年夏、私が訪ねた時は、サツエさんは口から食べ、笑顔を取り戻していました。

「かあさんの家」は住宅街にあるごくふつうの民家なのが特徴です。宮崎市内では4軒が増え、40人を看取りました。庭や縁側や物干しがあり、ご飯が炊き上がる香り、包丁の音がします。老いや病とともに1軒に5人が暮らしています。昼2人、夜1人のヘルパーが交代で入ります。ナースコールはなく、「気配」を察してケアします。そこに医師や看護師、歯科医、さらにご近所の人を訪ねます。医療や介護の現場で矛盾に直面し、ここを訪ねた人たちが「こんな方法があった」「これならできそう」と、各地でホームホスピスを始めました。なごみの家

(神戸市)、愛逢の家(兵庫県尼崎市)、われもこう(熊本市)、たんがく(福岡県久留米市)、オハナの家(長崎県新上五島町)、ひなたの家(兵庫県姫路市)……。ただ、介護保険制度を超えての挑戦のえ、財源難が悩みです。そこへ朗報。宮崎市の「がんや認知症の人が家庭的な雰囲気の中で、最後まで安心して暮らし、安らかに看取られることのできる地域ホスピスに補助する仕組み」をこの春、発足させたのです。

「大量死時代にそなえ、看取る場を増やそう」と、ビジネスチャンスや財政面からのみ論じる人が増えているのが気がかりです。最期まで自宅で、という本人の望みをかなえたくてもかなえられない家族、何より、ご本人のために、「かあさんの家」のような、日本人の人情にあったぬくもりのある場が不可欠です。

先月8日、かあさんの家の市原さんから、ほのぼのとしたメールが届きました。△三戸サツエさんが昨日穏やかな最期を迎えました。家族も含め、みんなが集まっていました。娘さんが「かあちゃん、よく頑張ったね、ありがとう」と声をかけると、大きくうなずくように息をされそれが最後の呼吸でした。サツエさんご家族が、満足して別れの時を迎えた様子が目に浮かびます。

### 大量死時代



終戦とともにベビーブームが起き、47年から3年間、年間出生数は250万人を超えた。この団塊の世代が80歳代になる20年から25年後に「大量死」の時代が来ると予測されている。09年の死者数は114万人余りだが、国立社会保障・人口問題研究所によると、2030年ごろには、4割増の163万人が亡くなると推定されている。

# ホームホスピスの看取り

大熊 由紀子

国際医療福祉大大学院教授

くらしの  
明日  
私の社会保障論



—矢頭智剛撮影